=市史編さん便り=　【24 号】　令和 5 年 7 月 25 日(火)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

鳥島をジョンハウランド号で発った万次郎
北アメリカ大陸へと進む！

(1)鳥島を後にしたジョンハウランド号

鳥島で救助された万次郎ら 5 人を乗せて、ホイットフィールド船長の仕切るジョンハウランド号は、太平洋上で捕鯨を続けた。利発な万次郎は、その様子を目で覚え、クジラの見張りなど、自分のできそうな手伝いを積極的に行った。そのような米国船員たちとの触れ合いの中で、短期間で英語に耳が慣れ、片言ではあったが英会話ができるようになっていた。

1841 年 11 月 20 日(新暦)、太平洋上の要地カメハメハ王国のハワイ・ホノルル港に寄港する。この間、救助され鳥島を出港してから 5 か月余り、15 頭の鯨を捕ったことが、その『航海日誌』に記されている。

船長は、ホノルルの役所へ 5 人を連れて行き遭難した事情を説明した。ホノルルは太平洋上の帰路交通の要所であり、東アジアからも度々商船が寄港した。船長は 5 人に当面の生活ができるようにそれぞれに洋服一着と銀貨半ドルずつ分け与えた。また、他の船員たちもそれぞれにお金を出し合い、5 人それぞれに外套を買い与えた。見ず知らずの異国の者にこのような温かい情を注ぐ船長も、船員たちも、自分たちの家族のように漂流者たちを包み込んでいる。

(2)万次郎少年アメリカ大陸へ進む！

ここで船長から英明・闊達な万次郎を米国大陸に連れ、教育を受けさせたいとの旨が船頭の筆之丞に伝えられる。筆之丞は、万次郎自身にその判断を決めさせた。万次郎は米国大陸でもっと未知なることを学びたいと素直に思った。そこで万次郎は他の 4 人とホノルルで別れ、船長らと再びジョンハウランド号に乗り、12 月 1 日捕鯨の旅に出発したのである。

船は、太平洋上を南西にギルバート諸島、グアム、台湾西海上、琉球南海上を経て、鳥島周辺で捕鯨を続け、ホノルルへの寄港を計画した。しかし、逆風で寄港には適さず、止むを得ずホノルル沖合を南下し、タヒチをめざした。1842 年 11 月 28 日の『航海日誌』では、タヒチの西隣・エミオ島に投錨したことが記されている。『白鯨』を書いたハーマン・メルヴィル(1819～1891)も、同年の 11 月 19 日エミオ島を出港している。

ちなみに『白鯨』は、捕鯨に実際に携っていたメルヴィルの体験をもとにして創作され、1851 年に発表された長編小説である。アメリカ文学を代表する作品として有名である。少年万次郎と『白鯨』を書いたメルヴィルが、タヒチの西隣・エミオ島で 9 日間の時間差はあるがすれ違っているところはダイナミックな歴史の面白さである。

その後、ジョンハウランド号は進路を南米南端のケープホーンにとった。そこから進路を北にとり、大西洋上を北上。1843 年 5 月 7 日、万次郎はついに米国の本土を踏む。

【次号へ】

（参考文献）
①中浜博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』冨山房インターナショナル、2005 年。
②郷土の偉人中浜万次郎副読本編集委員会『郷土の先人 日本のとびらを拓いた人 ジョン万次郎』土佐清水市教育委員会、2020 年。

ジョン・ハウランド号の航路図

※この絵図は、②の書籍の５頁の図を掲載。

弘法大師座像が修理されて真念庵に戻る！

7 月 21 日に生涯学習課に修理に出されていた弘法大師坐像(像高 60 ㎝・寄せ木造り・江戸時代)が 23 日に真念庵に戻り、金剛福寺御住職の導師で開眼供養が行われるとの連絡が入りました。ちょうど休日であり、この供養に職員は立ち会うことができませんでしたが、今日（7 月 25 日）の高知新聞記事を読むと、沖上芳幸区長をはじめ地域住民の方が修理できたことを心から喜び、安心している様子がうかがえます。真念庵は、令和元年 8 月 5 日に土佐清水市指定文化財となっています。香南市夜須町の仏師・吉田安成さんが約 1 年をかけて修理し、今回庵に戻ったものです。